

都市河川における不法投棄〇をめざした多面的なソフト対策について ～事務所と出張所 1年間の奮闘～

伊豆野 史皇子¹

¹淀川河川事務所 福島出張所 (〒553-0001大阪府大阪市福島区海老江8丁目3-15)

淀川の塚本地区は、JR塚本駅から徒歩圏内と交通の便が良く、バーベキュー(以下「BBQ」という)等のレジャーを楽しむ人が多い箇所である。その結果、過去からBBQ由来等のゴミの投棄場所になっており、匂いや景観の問題で苦情箇所にもなっていた。2024年(令和6年)度に入り事務所と対策チームを作り、職員によるゴミ拾いや草刈り等を行い、美化活動を実施した。また、以前から設置してあった看板の内容を見直し、内容や立て方を工夫したところ、ゴミの投棄が激減し、美観が大きく改善された。

本論文では、ゴミの不法投棄撲滅に向けて行った一連の活動を振り返るとともに、対策内容について考察を行う。

キーワード 維持管理, 景観, 住民参加

1. はじめに

淀川は全国でも有数の都市河川である。福島出張所は東海道本線(上淀橋梁)より下流域を担当(図-1)しており、管理区域は大阪市中心部に位置し、河川敷も日常的に多数の人に利用されている。

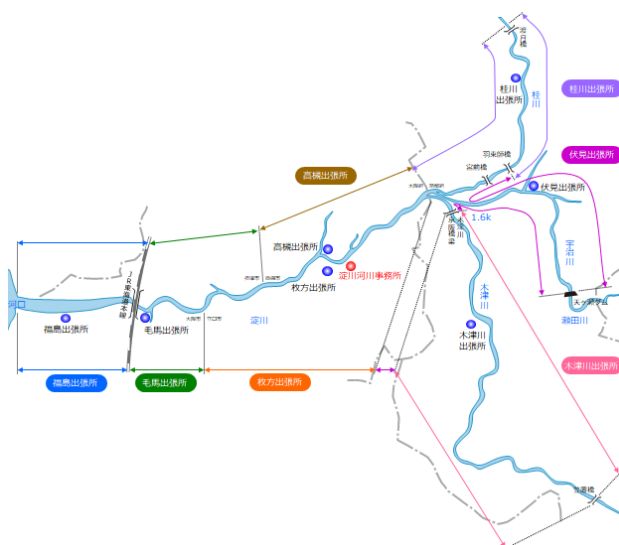


図-1 淀川の管理区域

特に塚本地区は、JR塚本駅から徒歩圏内と交通の便も良

く(図-2)、BBQや釣りなどのレジャーを楽しむ人が多い場所である。



図-2 塚本地区の位置図

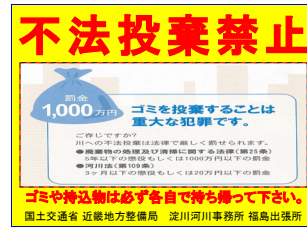
その結果、過去からBBQ由来等のゴミの投棄が常習化しており、特に気候の良いBBQシーズンには大量のゴミの投棄が続き(図-3)、匂いや景観の問題で苦情も数多く寄せられていた。



図-3 過去の投棄状況写真

回収してもすぐにまた投棄されるという状況の中、少なくとも月に1回、多い時は月に2回もの頻繁な塵芥収集が必要となっていた。それにより「この場所に捨てれば回収してくれる」という誤った理解につながってしまい悪循環が発生していた。ゴミの状況があまりに酷かったため、過去にも立て看板を設置して状況改善を呼び掛けていたものの、効果がほぼない状態であった。

(改善前の看板例)



(改善後の看板例)



2. 2024年(令和6年)度の取り組み内容

(1) 職員による除草、清掃活動

これまでの悪循環を断ち切って状況を改善するために、事務所と連携して対策チームを立ち上げ、意見を出し合った。その中で、草が伸びていることにより、ゴミを捨てやすい状況を作り出しているのではないかと、また、日常的にゴミが置かれている状況になっていることにより、ゴミを捨てる罪悪感が湧きにくいのではないかと、という意見が出た。そこで、2024年7月に、淀川河川事務所と福島出張所の職員により、除草活動と清掃活動を行い、現地を綺麗にし、また今後どういった対策を行っていくかについて意見交換を実施した(図4)。



図4 職員による清掃及び話し合いの状況写真



図-5 新旧看板事例

看板を見直したからと言ってすぐにゴミが0になるわけではないので、ゴミの投棄を見つけるたびにゴミを持ち帰ると共に、看板の内容を考えて看板を増設していった。看板を増設していく中で、不法投棄に関する内容ばかりではなく、利用者に興味をもってもらうことを目的として、淀川の魅力を発信する看板も設置してみることにした(図6)。

(2) 設置看板の内容見直し

対策チームでの意見交換の結果、看板の内容を見直してみることにした。過去からゴミの投棄防止を呼びかける看板を設置していたが、その内容は「不法投棄禁止」「カメラ監視中」といった、堅い文言が中心であった。そういう文言では利用者の心に響かないのではないかと、という考えの下、「キレイな川にしましょう」という河川愛護を促すようなソフトなメッセージや、ゴミを捨てる人が心苦しくなるようなメッセージに切り替えてみることにした。

また、まずは看板に興味を持ってもらう、見てもらえるものになるように、小学生が描いた絵やたのしいイラストを用いて、「現地にあるだけの看板」から「利用者に見てもらえる看板」となることを目指した。(図5)。

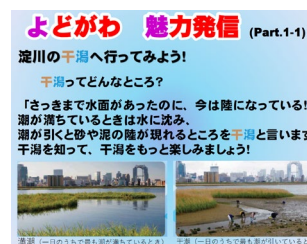


図-6 魅力発信の看板例

こうした対応を続けた結果投棄ゴミは減っていき、また、散歩中の人々が立ち止まって看板を見てくれているのを見かけるまでになり、看板の内容見直しの効果を実感することができた。

(3) 看板設置方法の見直し

看板の内容を見直すのと同時に、立て方についても一工夫することとした。これまでランダムに設置していた看板を一列に並べて設置することで、柵の効果を期待

した。また、これまで短い木杭を使用していたが、長い杭も併用することで看板を目線の高さまで上げ、より利用者の目につきやすい看板となるように工夫した。

(4) 外国人に向けた対応

塚本地区の特徴の一つとして、外国人の利用が多いことがあげられる。外国人利用者に人気の理由をたずねたところ、JR塚本駅から徒歩圏内、すぐ近くにコンビニがある、景色が良い(対岸は大阪市内のビル群を一望できる)、休むのにちょうど良い木陰がある、等の回答があった。

外国人によるゴミの投棄情報もあったことから、外国人向けの対応にも苦慮していたところであった。そこで、これまで見聞きした情報により、東南アジア系の方の利用が特に多いことがわかったので、その情報を基にまずは河川利用者に対してどこの国出身かを尋ねるアンケートを設置してみた。対象は、ベトナム、インド、ネパール、インドネシア、日本、その他、とした。リアクションがあるかどうか疑問であったが、約2ヶ月の調査で76人という、当初予定していたよりもはるかに多い回答を得ることができた(図-7)。

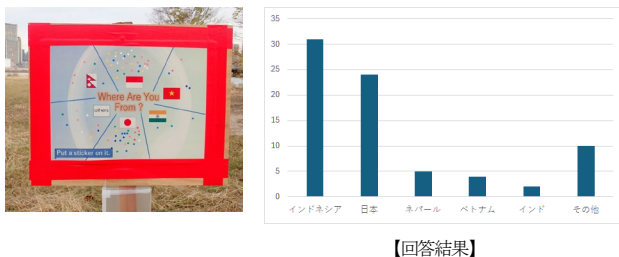


図-7 外国人に向けたアンケート結果

次に、アンケート結果により利用を確認した国の言語で、「河川を綺麗にご利用いただきありがとうございます」という多国籍語の看板を設置(図-8)した。注意を促すよりもお礼の言葉を並べることで、心理的に捨てにくくなることを期待した。

翻訳は、「公益財団法人 大阪府国際交流財団」に依頼しボランティアの方達に協力いただいた。ボランティアの希望があれば翻訳作業に協力いただけるが、希望がない場合は翻訳が難しい場合もあるので、翻訳をどこへ依頼するかは、新たな課題であると感じた。



図-8 多国籍語による看板例

また、投棄ゴミの中から特定の言語で書かれた調味料を発見したため、その言語で河川の利用ルールを記載した看板を設置したり、外国人が好みそうな絵柄を使用した看板を設置したり、とどのようにすれば看板を見てもらえるかということを常に意識しながら対策を続けた。

(4) SNSによる情報発信

現地での対策に加えて、事務所のメンバーが中心となり、SNSによる情報発信も行った。職員による清掃活動や看板設置の状況をXに投稿し、広く啓発活動を行った。

3. 地元中学校への協力依頼

(1) 協力依頼を行うこととなった経緯

前述してきた対策により、現地はほぼゴミのない状態をキープすることができるようになり、半年前とは見違えるほど綺麗な空間となった(図-9)。



図-9 対策後の様子

これまで順調に進んできたと思われた対策だったが、2025年1月28日に、設置していた20枚以上の看板が一晩で全て引き抜かれるという事案が発生した。この時、不特定多数を相手にしている難しさを改めて痛感した。単なるいたずらか、又は看板や行政に悪意があったことか、詳細は分からなかったため、どのようにリアクションを取れば良いか分からなかった。しかしその後、目撃情報により、行為者は学生の可能性があることが分かった。看板設置の内容を考えると、これまではどちらかというと大人を相手として考えていたが、もっと幅広い年代に向けたメッセージが大事であることに改めて気づかされる出来事であった。そこで、これからの未来を担う学生にも、ゴミの不法投棄問題を自分の問題として捉える機会となるように働きかけてみようと思い、近隣の中学校へ不法投棄撲滅に向けた対策について協力依頼を行うこととした。

(2) 中学校との連携

近隣の中学校は以前から河川レンジャーによる活動実績があり、河川レンジャーと連携し不法投棄対策について協力依頼を持ちかけた。その結果、学校側に快諾いただき、生徒会メンバーによるポスター作成を協力いただ

けることとなったため、2025年3月に中学校へ赴き、生徒会メンバーと対談した。その後、学生達が美術部やボランティア部にも協力依頼を行ってくれ、2025年7月、遂にポスターが完成した。

(3) ポスター設置

2025年7月23日、学生たちが河川美化に向けて一生懸命考えて作成してくれたポスターを受け取ることができた。14枚とたくさん作成していただいたので、河川利用者に見てもらえるように、作品ギャラリーとして現地の看板に貼り出すことにした(図-10)。学校側からは、「ポスター作りにあたって部活動で連携することができ、学生達にとっても良い機会となった。また協力できることがあれば声かけてもらえれば。」と嬉しいお言葉をいただいた。



図-10 作成いただいたポスターと設置状況

4. その後の対策

外国人の利用が目立ってきたため、外国人への周知方法について再検討しているところである。まず、不法投棄対策の協力依頼のため、近隣の日本語学校を訪問したところ、翻訳の添削や不法投棄禁止のポスター掲示についてご協力いただけることになった。また、外国人主催のマラソン大会で、淀川を利用するうえでの約束事項を記載した名刺サイズのカードの配布を依頼し、淀川を利用する外国籍の方々へも広く周知することを試みた。さらに、看板だけではなく、人感センサー付き録音再生機器の設置による多言語の音声での発信も検討中であり、多国籍語で広く周知する方法を試行錯誤中である。

5. 対策の効果と考察

(1) 対策の効果

看板の設置方法、内容を見直すことにより、費用をかけずに対策をすることができた。散歩中の人たちが足をとめて看板を見てくれていたので、アピールの場として使えると思われたことは嬉しい誤算であった。

以前は、維持作業によって、ほぼ毎月、多い時は月に2回も、2t ダンプ1台分もの塵芥収集が必要であったが、

対策を始めてからは維持作業による塵芥収集で処理することなく美観を維持できるようになり、維持費の削減にもつながった。

(2) 対策に対する考察

塚本地区は良くも悪くも人通りが多い。利用者が多くなればそれだけゴミも出やすいが、同時に人目につきやすくなる。利用者の目にとまりやすい看板を設置したことにより、利用者同士での抑止力にもなったのではないかと推察される。また、散歩で日常的に利用されている地元の人達が外国人利用者に対してゴミの持ち帰りを呼びかけてくれることもあり、問題解決のためには、利用者とのコミュニケーションが欠かせないものであることを感じた。

また、以前よりBBQ由来等のゴミが多く、本当に悪質な不法投棄が少なかったことも要因の一つと考えられる。

ゴミの投棄は良くないことであるという認識を持っている人が大半だが、中には、「みんな捨てて帰っているから私も捨てて帰ろう」という軽い気持ちで捨ててしまう人もいる。心理コンサルタントの富田隆は、このような人達を「グレイゾーンの人」と呼んでいる。同氏は、講演の中で、ポジティブ・リインフォースメント(正の強化)がポイ捨てしない心を育むと述べている。グレイゾーンの人の中には、罪悪感はあるが人を見ていなければ、あるいは罰せられなければポイ捨てをしてしまう人がある。そうした人への働きかけには、2通りあり、監視カメラの設置や罰金など、罰を与えることで行動を制限させるものが1つ目にある。面倒なことを避けたい心理がポイ捨てを抑制し、これを「ネガティブ・リインフォースメント(負の強化)」と言うが、こういった対策では徹底的な監視社会にしない限り、ポイ捨てはなくなる。一方で、2つ目の「ポジティブ・リインフォースメント(正の強化)」というやり方は、褒められたり認められたりすることで、良い行いを強化・促進するもので、こちらのほうが内在化されやすい。と、講演の中で述べられている。

従前の対策が「ネガティブ・リインフォースメント(負の強化)」というやり方であるとする、今回試みたのは、「ポジティブ・リインフォースメント(正の強化)」というやり方である。ポジティブな言葉を使って協力を呼びかけ、ゴミが減ったらお礼の言葉を述べる。お礼の言葉が褒美になっているかどうかは甚だ疑問が残るが、少なくとも認められる、という点ではこの考え方に沿っていると思われた。

ゴミの投棄を見つけた場合は極力速やかに持ち帰ったことや、看板の内容を頻繁に変更したことによって、この場所はきちんと管理されている場所であることが伝わったと思われる。ゴミを放置するとどうしてもゴミ置き場として誤認される可能性があるため、現地を極力綺麗な状態にしておくことは重要であると感じた。さらには、

小学生の絵やイラスト入りの看板を設置したことで、河川利用者が地域との繋がりを感じ自分も地域の一員であるということを再認識するきっかけとなったのではないかと、大事な場所にゴミを投棄する人は少ないと思われる。利用者にとって大事な場所であり、利用者自らが綺麗な状態を保ちたい、と思えるような場所にしていくことも重要であると感じた。

(3) 対策を継続するにあたっての問題点

看板設置はお金をかけないように木杭で行っているため、随時手入れと更新が必要であるが、人事異動等で、人が替わってしまっても地道な維持管理を継続できるようにしていくことが課題の1つと考える。淀川には「河川レンジャー」という制度がある。福島出張所管内にもゴミ問題に積極的に取り組まれている河川レンジャーがいるので、そういった方と今後連携していくのも一つの手であると考えられる。

また、外国語の翻訳作業をどこへ依頼するか、ということも課題の1つと考える。近隣の日本語学校へ投棄ゴミ対策の協力依頼を行っているところであり、今後ゴミ問題に興味のある学生さん達と一緒に投棄ゴミの問題について考える機会を設けたりしてパイプ作りをしていきたい、と考えている。

6. おわりに

今回の対策は所内で対策チームを作って、職員が当事者意識を持って意見を出し合い、それを一つずつ実行に移していくことから始まった。対策は手探り状態で、どのような対策をすれば利用者の心に響くか、利用者の心理を考えながら試行錯誤の連続であった。対策の一つ一つは小さなことであったが、継続することにより大きな成果を上げることができた。また、所内だけにとどまらず、近隣の学校にも協力いただき、地域連携をはかるこ

とができた。

地元からの反応も以前とは全く異なり、以前は苦情のメールを送られていた地元の人からお礼のメールが届くようになったり、現地で会う利用者の人からも「キレイになった」「だいぶ良くなった」と賛辞の言葉をいただけるようになったりした。また、苦情件数が減るのと同時に、地元住民からかかってくる電話の内容もゴミで迷惑を被っているというお叱りの連絡ではなく、ボランティアでゴミを集めておいたので処理して欲しい、という内容へ変化してきており、地元の人にも対策を好意的に受け止めていただいていることがうかがえる。

現地の状況は以前と比較すると圧倒的に良くなったが、ゴミの投棄が完全になくなったわけではない。不特定多数を相手にしている難しさでもあるが、ほんの一部でもグレーゾーンの人達がいると、ゴミが投棄されてしまう。いかにグレーゾーンの人達に投棄をさせないような環境を作って、意識を変えていくことができるか。投棄があると残念に思うが、まだ他にもできることはあるはず、と諦めずに知恵を絞っていきたい。

最終目標は看板がなくても綺麗な状態を保つことであるが、まずは看板等の設置により綺麗な状態を保つことができるように、今後も尽力していきたい。

謝辞：ポスター製作でご協力いただいた新北野中学校の関係者の皆様には大変お世話になりました。また、淀川河川事務所の関係者の皆様には暑い中での除草や清掃など、大変お世話になりました。色々な対策を試行できたことは、対策を後押ししていただき暖かく見守っていただいたおかげであると、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

参考文献

- 1) 「ポジティブ・リインフォースメント(正の強化)がポイ捨てしない心を育む, https://steelcan.jp/sca/v33_3/, (参照 2025.7.3)